



TITLE:

## 朝鮮地名の考説(二)

AUTHOR(S):

中村, 新太郎

---

CITATION:

中村, 新太郎. 朝鮮地名の考説(二). 地球 1925, 4(2): 162-170

ISSUE DATE:

1925-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182979>

RIGHT:

講話

朝鮮地名の考説(二)

中村新太郎

二、行政區劃に關する地名

現今朝鮮は行政上十三道に區劃され、此の下に十二府、二百十八郡、二島がある。道は内地の府縣に相當し府郡島は各々市郡島に該る。郡又は島の下に總數二千五百四の面がある。面は行政の最下單位で内地の町村に該る。面の下に里又は洞があり(其多くは里である)内地の大字に相當する。府では内地人の住居することが多い部分は里や洞の代りに町、通りを用ふる。町里洞の數は大正十三年六月現在で二萬八千三百一ある。之等郡面里洞の數はもと多と多くて併合當時には十二府三百十七郡、四千三百九十二面、六萬三千八百四十五洞里あつたが大正三年三月郡の廢合を行ひ又其後土地調査と共に里洞名の整理を行つた結果數が減じたのである。上記の里洞の下に小字に相當する里洞があり、此の内には特に里や洞を附けない地名が少くなく、其の一部は五萬分一地形圖に

標記されてあるが又標記されていないものも可成りある。之等の小地名が地名考説の上では甚だ面白いものである。

道 朝鮮はもと十道に分けたり、八道に分けたりした、鶏林八道は我等に耳なれた熟語であつた今では京畿道、忠清北道、忠清南道、全羅北道、全羅南道、慶尙北道、慶尙南道、黃海道、平安南道、平安北道、江原道、咸鏡南道、咸鏡北道の十三である。之を略して時に京畿、忠北、忠南、全北、全南、慶北、慶南、黃海、平南、平北、江原、咸南、咸北と書きもするし云ひもする。古來朝鮮では大きな地方別を通常用ひた。例へば咸鏡道を關北と云ひ、平安道を關西と呼び、黃海道を海西と稱へ、江原道を關東、忠清全羅慶尙道を併せて三南と呼び、全羅道を湖南と云ふ如きである。現に大田より分れて全羅南北道を縦貫する鐵道線を湖南線と呼んで居る。然し當今では咸鏡南北を北鮮、平安黃海を西鮮、全羅慶尙を南鮮と呼んで居るが之に京畿江原忠清を中鮮として加へれば人文地理上では朝鮮全土の良き地方別が出来る。

道にはもと行政官の首腦として觀察使があつたが併合以來長官と改められ今では復た内地と同じに道知事になつた。道廳の所在地は交通機關の設備が出来るに従つて變へられることもあつて現に一昨年の暮に平北道廳が義州から新義州に移つた。

府、郡、島 昔は道の下に其重要さに従つて府、牧、都護府、郡、縣の違つた名目を持つた郡

があつたが明治廿八年に一反總てを郡に改めた。今では府郡島の三種になつた。府は京城、釜山、馬山、群山、木浦、大邱、仁川、平壤、鎮南浦、新義州、元山、清津の十二で行政官として府尹が居る。

郡には郡守があり、鬱陵島及濟州島の二島には島司がある。

郡廳所在地を邑と稱へ、昔邑であつた處に邑のついた地名が残つてをたり又は古邑といふ地名も少なくない。邑又は邑内と云ふ代りに郡(コウル)又は郡内(シヤ)と云ふこともある。府郡廳所在地即ち邑は多く在來の都市又は大集落地であるが併合後交通機關の發達につれて邑の位置を代へたものもある。京畿の廣州邑は山地の高い處にあつたが低い交通の便利な京安里に移され、黃海の平山郡邑が交通の衝に當る南川に遷されたりした。朝鮮では都邑や集落の移轉は内地程億劫なものではなく朝鮮人は移動し易い人種であるのである。

郡名を通覽すると城のつくものが二十箇所もある。就中京城、開城、鏡城は主要な都市である。

郡邑には石牆又は土壁で圍まれたものが多い。寧ろ朝鮮の都邑は總て城であると云つてよい。其あるものでは京城の様に都邑四周の山稜に壁を造る、從て外廓は橢圓に近い。或る邑は平地に四角又は圓形に近い外形を持つ様に壁を繞らすので其四角なものは支那の集落に似て居り其の圓形に近いものは大邱の様に城壁を撤去すれば其處に美しい環狀道路(リング・ロード)を造ることが出来る。城壁は何れも堀を

繞らさない。此の點も支那集落の土壁に同じい。

山城は三國時代からあつて今でも丘陵の上に殘牆を殘して居るものが多い。かう云ふ處には山城里といふ地名が殘つて居ることもある。土城があつて土城と名のついた處も少くない。開城郡中西面の土城は恐く高麗朝のものださうだ。こんな山城や土城は其の殘壘が畑の間などに殘つてゐて遊子をして祇徊去り難からしめる趣を呈する所がまくなきにもあらずである。

高句麗では城を忽(コル)と云つた様である。忽の今の音はホルである。又昔は伐(ボル又はブル)とも呼んだ。此外加羅、古羅、狗盧、溝瀆、支、斯只等も城塞又は都邑を指した言葉だといふのである。忽が城であるといふ例は東國郡縣沿革表を見ると、高句麗や百濟の忽が一名城であるか又は新羅になつて忽が城に變へられた二十餘の郡縣名の實例を獲るが其二三を擧げると次の如くである。

高句麗			
買忽縣	買忽郡	沙伏忽	達忽郡(百濟)
新羅			
邵城縣	水城郡	赤城縣	高城郡
寶城郡			
高麗			
仁川	水州	陽城縣	高城縣
寶城郡			
朝鮮(李朝)			
仁川府	水原府	陽城郡	高城郡
寶城郡			

なほ忽は谷のコルをも現はして居たことは後に述べやう。

郡名には又州を附けたものが多い、州縣に分けた名残りである。邑が附いた郡名は全北の井邑のみである。舊時の邑を示した古邑、舊邑、邑内里、邑城里等の地名があり又破邑、罷邑等の小集落もある。

郡名を日本讀みにする時は區別のつかぬものがある。廣州京畿南公州忠南光州全南黃州黃南や、丹陽忠北潭陽全南や、高陽京畿南光陽全南や、高原咸北洪原咸南や、金泉慶北金川黃海や、昌城平北鍾城咸北や、清州忠北星州慶北の如きであるが朝鮮音ならばある程度まで區別があるのである。

行政區劃で云ふ島には主要な島嶼の外に屬島があるから地理學的には本島のみであるか行政區劃の屬島を加へたものを、區別せねばならない、これは内地の島制のある島でも同じことである。

舊時の行政區劃である牧がついた地名は少ない。牧溪などがある。縣の方は縣内里、縣里等の地名が時々ある、昔第二位の郡邑即ち縣の址を示したものである。

面は内地の町村であるが内地の郷に當るもので方面を指したものである。其れ故邑を中心として東面、西面、東上面、東下面、東内面と云ふ様に方位を示したものが少くない。もとは面の代りに社又は坊を用ひた處もあつた。社は咸鏡道に多く坊は黃海道などに多かつた、又京城では内地の區に當る所に坊を用ひて居た。社は地名にもあつて社倉平南や雲社咸北などがある。昔部曲と云つたのは面に似たもので收税などが正規のものでない特別の區域であつた様だ。

大正三年以前までは面の區域には甚だしく廣いものがあつて當時の咸南長津郡東上面の如きは南北約十五里に亙つて居つた。其後面の地域を改めて大小の差が少なくなつたがまだ中々大なる面もある。最大の面は咸北茂山郡三社面で百四十六方里一九九の面積があり、最小の面は忠北清州郡清州面で〇方里〇五三に過ぎない。而して面の平均面積は五方里五五一である。一般に北部に於て面が廣いのは人口の密度が小さい爲めである。

現今面のうちで内地人が多く住居し市街地を形成する面は指定面と稱され面長及選舉により選出された協議員より成る面協議會と稱する諮詢機關があつて起債能力を認められて居る。かゝる特別な指定面は四十一あつて此等は府以外の著しい都邑である。

里 支那に於ける意義は周禮によると五十家を以て一里とするのであるが、朝鮮では今は單に村落を表はして居、面に屬する土地區劃の名稱として洞と共に用ふるのである。里と洞との間には何等大小の關係はないが今ではどちらかと云ふと里の方が大きい區分に用ひられて居る。里を大字とし洞を小字とするのが多い。里はイー又はリーと讀んで訓のマルを使ふ場合は地名にはない様である。

洞 音はトングで訓はコルである、谷を云ひ又谷地の集落をも云ふ。小集落の單位である。一體朝鮮には大平野がない、主に丘陵地であり谷が多く谷に沿うて平地がある。かく谷から起つた洞を

稍大なる平地に散在する小集落にも附けるに到つた。洞は恰かも滿洲に於ける溝や峪に相當するものである。村内を洞内(トングネ)と云ひ、村の所有山を洞山(トングサン)と云ふ。

谷 一般に小地名に用ふる。然しこの下に里を附けて錦谷里、書谷里、大谷里などゝして里名とする。洞と谷とは同じ意味に用ひ、音は洞はトング、谷はコクであるが訓の方は共にコル、コリ(平北で用ふる)又はシルである。それで何々洞と書いてあつてもトングと呼ばずに何々コルといふ場合が多い。南鮮ではコルと云はずに谷をシルと讀ませるが谷とも書くし寧ともかく。蓋しコルの方言である。

一般に朝鮮の民居は廣き平地以外では山谷中に散布され、民居なき谷は甚だ稀で、よもやと思ふ狭き谷、小さき谷、森で蔽はれた谷の中にも見出すのである。五萬分一地形圖には小谷の中の四五戸まで群居したり又は獨立の家屋がぬけてをる。殊に開折された高原地へゆくとき家居の存在を認めることが困難である。昨年旅行した江原道の南部寧越郡上東面などでは殆んど谷毎に數戸の人家(後に述べる定住した火田民家)があるのが五萬分一地形圖には書き現はされて居ないと同時に谷の地形の書き方はまるで出鱈目である。

朝鮮の谷には如何な小谷でも必ず名がある。隨分笑はされる様なものもある。一例を挙げると張書房墓谷チャングサングモイコルといふのは張さんの墓のある谷といふ意味である。小谷の名は普通地圖には掲げられて



ないが、前にも云つた様に地名考説上價値の大きなもので、昔から轉訛はいくらかあるにしても兎も角言ひ傳へ言ひ傳へして残つたものであるから、現に其地方の人達には其命名の理由が忘れられてはゐるが其獨自特有の名を保存して居るのであるとは明である。それで小谷の名で地物の特有なこゝとや礦物類の存在を推知することが出来る。小地名殊に小谷名の探訪蒐集は地理學上甚だ必要であると共に、古き歴史を明かにし、新しき統治を行ふ上にも參考となるものであると考へる。

谷の名の二三に就いて今述べた所を補つて試る。普通の谷の名に通谷(トングゴル)と云ふのがあゐる。之は此の谷を溯り峠を経て山の他側に通過し得る路のついでる谷である。峠を容易に越せる様な道路を持つた山の兩側の谷は同じ名で呼ばれる場合がかなりある。但し呼び方は同一でも文字だけは變へて混同の一部を避ける。例せば平北雲山郡克城洞の峠一つあちらは熙川郡極城洞である類である。又直洞(音讀はチクトング、訓讀はコツンゴル)は谷の屈曲して居ないまづ直線に近い走向を持つた谷である。高屯里(コツンリ)の如きは蓋し直を書き換へたに過ぎない。

私は嘗て江原道のある處で舊時の銀鑛産地を探らうとして農夫に其遺址を尋ねたが判らない、そこで此附近に銀店谷ウシジヨムゴルと呼ぶ谷はないかと聞いたところ、銀店谷はかしこだと教へて呉れた。蓋し銀店は銀冶である。銀を製鍊する工場のある處である。そして其教へられた谷を上つて行つて舊時の銀鑛採掘跡をつきとめたことがあつた。又ある年ゴツチエの朝鮮地質記事によつて平北厚昌郡子開チヤゲ

洞コ子開は貝チヤグであらう、谷形貝に似たるより名付けたのであらうに朝鮮玉の產地あるを讀んで之を

檢せんとし子開洞に行つてその一軒屋で尋ねて見たが玉オクの產地を知らない。そこで試みに屋後の

一小谷の名を聞いて試たところ、玉石谷オクトルコルと答へるではないか、しめたと思つてその小澤を上つて谷

底に露はれて居る黄色の玉の産狀を明かにして石灰岩から變質したものであることを確めた。又多

くの砥石谷スツルコルといふのに陶器の原料である陶石を産する。之は岩脈をなす半花崗岩で陶石又は砥石とし

て用ひられるものである。こんな風地名を利用して幾多の忘れられた鑛床を發見した。これ等に就

いてはなほ生業に關する地名を解釋する條下に述べるとして茲に應用地名考説の一端を云つて見た。

谷は高句麗で忽コル、骨コルと書きたる香堂カン・タン・香忽カン・コルとも云つた。二三の例を擧げて見ると高句麗では黃

海道の今の平山を大谷とも多知忽とも云つた、又今の黃海道の瑞興を五谷とも于次吞忽とも云つた、

高麗時代の咸鏡道の翼谷を於支吞と呼び、新羅高麗の江原道羽谿を羽谷とも玉堂とも言つた。

村 里洞に比敵するものに村がある。村の附いた地名は割合に少ない、朱村とか宋村とかの様な

のは此處に住居して居る又は住居した主な者の姓氏を採つたのである。校村洞は郷校のある村で邑

に極接近した處である。此のほか北村洞だとか五老村だとかいある。五老村オ・ロ・チ・ヨシは語路がよいので村と

つけたのではなからうか、村の訓はマウルで之がマルに約され又方言として村のトをマシルと云ふ。